

インド自動車部品産業の対外経済活動と生産性：企業データを利用した実証分析*

佐藤隆広

(神戸大学経済経営研究所)

要旨：本研究は、インドの自動車部品産業の対外経済活動と生産性の関係を、インド自動車部品工業協会 (ACMA) 発行の企業年鑑とインド政府の会社省のオンライン企業基本情報データベースを結合した独自データを用いて分析する。ACMA の企業年鑑には、輸出のみならず、輸出相手国企業や国内における外資系顧客企業、さらには資本提携や技術提携などの外資提携、ISO を初めとする国際認証の取得状況など、他の統計では入手ができない対外経済活動にかかわる情報が収録されている。第1段階目でインド自動車部品産業の生産性を推定し、第2段階目で推定された生産性と対外経済活動の関係を分析する。分析の結果、以下の諸点が明らかになった。第1に、生産性の高い企業は、生産性の尺度に関わりなく、(1) 外資提携を行っている、(2) 自動車製造に関する国際認証を取得している、(3) 日本人が社長である、という特徴を有している。第2に、労働生産性の場合、生産性と規模には正の相関があるのに対して、総要素生産性の場合、生産性と規模には負の相関が存在する。第3に、生産性と輸出には統計的に有意な関係が観察されなかったが、生産性と日本への輸出には(すべての特定化ではないものの)統計的に有意な正の相関が観察された。第4に、生産性と取引ネットワークの中心性(固有ベクトル中心性)の間には逆U字型の関係が存在している。

(*)本研究は、基盤研究(B)「インドの産業発展と日系企業」(代表:佐藤隆広、25301022)の助成を受けたものである。